

1 はじめに—本書の出版について

まずは本書の出版をお祝いしたい。上前智祐が残した膨大な作品群の全貌を見渡せるようなカタログレゾネはもとより本格的な画集もいまだ出版されていない。カラーの作品図版がある程度収録されているのは、作家による自費出版物「孤立の道」(1995)、大阪府立現代美術センター開催の展覧会図録(1999)、B B プラザの展覧会図録(2012)、ホワイトストーンのカatalog(2013、2015)などであろうか。(註1)今回、上前智祐記念財団の西脇寿宏氏が、上前の「縫い」の作品に限定して、176点に及ぶ作品を調査、作品画像と作品データを収集、整理、それをさらに関連資料をはじめ、上前日記の「縫い」に関する記述や上前自身が残した詳細な作品記録ノートなどと照合し、レゾネに近い形で本書の出版にこぎつけた。そのご尽力に関して、敬意と感謝を述べたいと思う。なぜなら、画家・上前智祐の人と作品を語る上で、こうした作品の基本データの整理は欠かすことができないからである。また本書には、上前自身が自作「縫い」に関して語っている文章もほぼ網羅、再録されている。その結果、本書は上前智祐とその「縫い」を語る上で欠かすことのできない基本文献となった。さっそく、私も本書をベースに上前智祐の「縫い」を論じてみたい。

2 「縫い」初期の作品分析 Section1 1975～1986

上前が「縫い」の制作を始めたのは1975年8月21日である。(註2)日記で上前は「縫い」という言葉ではなく「布縫制作始める」と記している。そして本作品集の冒頭のNo.1, 2, 4がこの「縫い」を始めた1975年の作品とされている。本書の作品の制作年などの特定に関して、西脇氏は実際の作品裏面の記載事項、写真資料(ポジ)に記された日時、上前日記の記述とさらに上前の自著を含む各種関連文献、当時の上前の動向などを合わせた詳細な分析に基づいて判断されている。最初の三点は現物確認ができていない。写真や図版のみでは「縫い」の糸や布のテクスチャー(実際の物質感や材質感)や寸法、制作年などを見極めることは難しい。それゆえに、これらの制作年代を特定することには危険を伴うが、現時点における判断とすることは可能であろう。

No.1は赤い糸の縫いあとが明確で、写真では、縫い目のすき間が赤く彩色されているように見える。上前が日記に書いている「補色」とは「赤と緑」といった補色関係のことではなく「赤い彩色で補う=補筆、補彩」という意味と思われる。

No.2の作品写真の裏面には、75.10.12の記載があり、それは芦屋(市美術協会)会員展(註3)のパーティーの日付であり、日記にも(出品作は布縫い)との記載がある。写真では作品の右側にキャプションも確認できることから、会員展の出品作品と判断された。この作品は「縫い目」を強調した作品というよりも、薄い白い布の「縫い合わせ作品」のように見える。筒状に巻縫いにした布の上下に棧(棒)を通し、垂らして展示している写真である。

No.4のモノクロ写真の裏面には76.2.4の記載があり「孤立の道」(P110)(註4)にも同じ図版が掲載されており「最初の頃の縫いの作品1975年」と記されている。この写真だけでは、布や糸の色彩、材質感、縫い目や縫い合わせの跡などは十分に確認できない。縮緬織のような細かい波皺が見えるだけである。同時期の日記には「75.11.6～縫作品、128×92の黒布に赤糸の作品」「糸は二重をといて一重にやりなおした」とある。これが図版の作品と同一のものかどうかは、色彩も作品寸法も不明なので何とも言えないが、少なくとも縦横比は同じである。しかしながら、黒布に赤糸という色彩では、このようなモノクロ写真にはならないと思われるので、現時点では別作品とした方が無難である。

No.5～14は1975年頃となっている。ポジマウントには78年など他の記載もあるが、作品の裏面記載の1975を採用している。枠張り(額装)は20年後の96年にされたようである。この時期には紺紫(青)色の古布に黒糸で縫った作品が多い。また白っぽい布や古いレインコート地を縫い付けた作品では、「縫い」よりも「布の縫い付け」「縫われた布」が強調されている(No.8～10)。古裂のパッチワークのような作品である。76年からは白布に赤糸や濃紺(黒)糸による縫いを中心とした作品が続く。76～86年の10年間には、紺(紫)や黒、白や緑、黄も、様々な形で効果的に使われてはいるが、基本的には、赤を基調色とした赤糸、赤布、黒糸による作品が中心であったといえよう。一方で、縫いによる布皺によって、あたかもテープが縦横に交差しているように見える作品(No.40,41)、また方形タイルによるモザイク画にも見える作品(No.45)、表面に縫い糸を長く出した毛織の玄関マットのようなテクスチャーをみせる作品(No.47)なども制作されている。

3 「縫い」新たな展開

Section 2 1986～1992

この時期の「縫い」には、「黒布に白糸」、「紫（青）布に白糸」、「黄布に黒糸」、「黒布に赤糸」の4種類の作品がある。普通は「白地に黒」という先入観から「白布に黒糸」と思ってしまうが、実際には「黒布に白糸」である。地の色である黒は、白糸による運針でできた縫い目の跡で覆いつくされ、白と黒のどちらが布でどちらが糸なのか判然としなくなっている。No.60は、黒布のほとんどが白糸で縫い尽くされて、覆われて白くなっている作品である。こうした作品を見ると、果たして本当に、地に黒布を使う必要性があったのかと思うぐらいである。また、別の作品では垂直の赤い縦のラインが1本、2本、それがあつた時には黄色いラインになったり、時折小さな矩形（四角）が施されたりする。さらに「黒布に白糸」の作品では、縦横に様々な縞（波）模様が見られたり、89～91年には、円形模様が一つ二つと細かい縫い目の集積の中に浮かびあがり、後半の作品ではその円形の数が増殖している。果たして手縫いだけで、これだけきれいな円形模様を浮かび上がらせることができるのだろうか？あるいは、最初から計画的につくり出された円形模様なのだろうか？こうした誰もが持つであろう疑問を、インタビュアーの清水公明が「この円い形にはエスキースなどあるのですか？」と問いかけたところ、上前は「そんなものはない、画面の裏からザッとまるを描いてから縫っていただけだ。」と語っている。（註5）最初、これらの作品を図版で見たとき、私はそれが「縫って」できた作品とは認識できなかった。ビデオアートの走査線模様か、磁石の粉を散らして制作したような現代美術作品かと思っていた。

上前のこうした「縫い」作品は、一見したところ機械による「編みと織り」でできたごくありふれた普通の織布、布生地、柄・模様のようにも見える。その時、私たちは、「編み」や「織り」と「縫い」とは異なるということを改めて思い知らされる。「編み」や「織り」は、編み棒や機織り機などで、糸を縦横に編み、織って、最終的には平面的な布生地（反物）あるいは手袋やセーターなどの衣服や造形物などに仕上げる手法である。しかし上前の「縫い」は、既にある布平面を支持体にして、そこに糸を通した針で一針一針と縫って、縫い目の点々を集積・増殖させ、背景の布地を、その点々によって埋めてゆく作業である。日本には出征兵士の無事を祈願して、千人の女性が赤い糸を白い木綿布に縫い付ける「千人針」という風習があつたが、上前の作品は「千人針」ではなく、上前一人による「無限針」である。完成された作品を枠張りし、絵画鑑賞のように、一定の距離を置いてその作品を見たとき、私達は、縫われたその糸の存在を忘れていた。それらは60代半ばの一人の男が、一針一針と気の遠くなるような時間を費やした運針作業を通じて出来上がった作品、それも衣服のような実用的な利用目的のない、純粋な平面作品なのである。それはどうてい信じがたいことだと言える。

1992年4月10日～22日、大阪市天王寺区上本町6丁目の近鉄ビルに近鉄劇場とともにあつたABCギャラリーで、朝日放送・近鉄百貨店主催で上前智祐自選展が開催された。出品作は78～91年の14年間に制作された「縫い」の作品だけ34点がまとめて展示された。（註6）「具体」の解散から既に20年の歳月が流れ、上前が「縫い」を始めて17年の月日が経っていた。この展覧会はいわば上前の「縫い」の集大成の発表であつたといえよう。

10日の初日に嶋本昭三、赤根和生、岡田博、杉山英行が、翌11日には、元永定正、向井修二、白髪一雄、浮田要三、久保晃、岡田が来場、在京の岡田は、東京で元永と飲んだ時に「上前の作品見てこい」といわれて東京からやって来た。他にも、前田、木村重信、片山昭弘、河野芳夫、桧垣、多津八洲子、辻喜代治、今田純子、河崎晃一、乾由明夫妻、鷲見康夫らが来場、この時の来場者の反応を上前は日記に次のように記している。

浮田は「こんなことをやっているものは（他に誰もい）ない、又やれる者もない。」向井は「見ていると線がサク乱して見えて実に面白い。」山下克彦は「遠くから、中間から、又はそばから見ていて、それぞれがちがって見えてすごい。」（山下はこの展覧会をビデオ映像で記録した）（註7）今村輝久は「これ程の作品のあることは凄い。」木下あづきは長時間鑑賞し、桧垣もまた1時間近く鑑賞した後「とても頭がつかれました、ふらふらするようです、見ていると画面がブラックホールの様で吸い込まれる様でした。」と感想を述べた。嶋本は後日4.14の手紙で、この上前の個展を見て、それまで上前の「縫い」を否定的に見ていたことに対して「自分の意見はまちがっていた。」と述べた。

4 「縫い」その後の展開と小品

Section 3 1995～1997

1992年のABCギャラリーで「縫い」34点をまとめて発表したことで、「縫い」の作品制作は一段落ついたのであろうか。93～94年の「縫い」は確認・掲載されていない。Section 3（1995～97）では、No.122の100号（黒布・白糸）やNo.125の300号（赤布・白糸）などの大作もあるが、その多くは小品が中心となっている。作品に見られる新たな展開としては、矩形（四角形）の縫い込み（No.118～120）、白や紺色の矩形の布の縫い・貼り付け（No.137,142）や、赤糸の縫い目で矩形を表した作品（No.140）などが特徴的である。こうした矩形（四角形）は、それ以前の「縫い」に

も時折出現しているものの、この矩形（□）が油彩などにおいて本格的に登場するのは1992年以降のことで、ちょうどABCギャラリーでの自選展の年である。また1995年の展覧会評で、ここ矩形（□）は「太い枠で囲んだ小さく曖昧な形の四角」（日経アート1995.11）や「アメーバーのようなリングによるバリエーション」（アートトップ1995）と表現されている。（註8）この唐突で曖昧な矩形（□）が何なのかについては、上前の発言や説明は確認できていない。ただ唯一、日記の中に、上前がフランスのシュポール・シュルファス運動のクロード・ヴィアラに言及した箇所があり「僕がこれから変わろうとする作品に似たことが一寸感じられるが…」（1998.11.22）（註9）というくだりがある。これが上前の四角を解釈する上で、何らかのヒントになるかどうかはわからない。ただ、この四角い輪模様は、上前がその晩年に、こだわりを持って、繰り返し表現した暗示的、特徴的な形であるということだけを記しておこう。

5 「縫立体」 Section 4 1978～1987

Section 4のタイトルはソフト・スカルプチャーとなっている。そのまま翻訳すると「軟らかい彫刻」ということになり、オルデンバーグの一連の作品を想起させるが、上前の作品はもちろんそれとは全く異なる。上前自身は「縫立体」という言葉を用いている。縫い作業によって縫い込んで制作された立体作品である。制作年代をみてもわかるように、縫いをはじめた初期の段階で、既に「縫立体」も並行的に制作されていた。紺紫の糸を使った作品が大半である。当初は、立体として自立するように、ボンドで固めたり、針金を使ったりと、様々に試行錯誤していたようであるが、いずれの方法もうまくいかず、縫い固める方向に転じたと上前は記している。（註10）「縫い」だけで立体として自立させるためには、縫い目のある布を二重三重にして、さらにその上から縫い固めるという作業を繰り返している。

6 「縫い」の誕生とその作品について

本書再録の文章にあるように、上前は自作「縫い」について詳細に語っている。（註11）それらによると、まず「縫い」は、黒い「セン」の油彩画の延長として制作されるようになった。油彩画の大作は油絵具代が高くつく。そんな時に回りを見渡すと、家の中には古いシャツなど、ぼろ布がいっぱい余っていた。それで、それらを挟みで切って、継ぎ合わせ、平面的に縫い合わせていくという造形手法を思いついた。農民たちの仕事着である野良着の「継ぎはぎ」、それらは古い布を重ねて、縫い合わせて、強化し、古びて擦り切れた部分には更に新しい布を当てて補強し、長期にわたって使用されてきたものである。そこには貧しくとも「生きる」という「執念」があり、そのことに感動することから、上前の「縫い」が始まったともいえる。「油絵具も繊維も物質に変わらない」そう思ったとき、上前の眼前に、自ら着古したレインコート地があった。

また、上前は小学校を卒業してすぐに舞鶴市の中村（美術）京染洗張り悉皆店に丁稚奉公に出された。その時に仕事でさせられた「仮縫い」や「は縫い」の作業が、誰よりも早くと褒められた。それから約40年の時を経て「神戸製鋼所」のクレーンマンとして働いていた時には、クレーン掃除のために一週間か10日おきに配布されるウエスと呼ばれるポロ布が、自分にとってはまるで宝物のように思えたという。

「ウエスについては、新品同様のものから継ぎはぎだらけの労働着まで千差万別です。色彩、布地についても同様です。紅絹（モミ）もあれば柔道着もあります。女性の下着も外出着も多くいろいろ雑多です。これらのポロ布はみな、洗って清潔で、ハサミの切れ目がいっています。このウエスは、どこの百貨店でも、生地店でも見ることのできないものです。それを僕がみるところは、クレンのデッキです。目につくそのあたりは、固い鉄ばかりです。そんな中でみる〈ウエスは〉ポロ布といえども輝いています。」（註12）

そのような少年時の記憶と経験、またクレーンマン当時の職場と生活環境そのものが、上前を、必然的に「縫い」に向かわせたといえる。

一針、一針、糸を布に通してゆく、果てしなく、気の遠くなるような作業。あるときはぼろきれを利用し、その繰り返しの作業中に、あるときは指を突き刺し、指や手首、腕や首や肩を痛めながらも、延々とその作業が繰り返される。布と糸と針と上前とによる、時間をかけた格闘によって、その結果「縫い」作品が生まれる。ペインティング（painting）の絵画ではない、スティッチング（stitching）の絵画である。アクション・ペインティングならぬ、アクション・スティッチングである。布と糸を用いているが、それは決して染織や織物ではない。上前が「縫い」を制作していた頃、丁度ファイバーアートの流行と重なり、一時期その仲間、類型と見なされて、そうした作家とのグループ展にも招待・出品しているが、上前の「縫い」はファイバーアートでもなければ、タピスリーでもない。まさしく「縫い」（NUI）としか言いようのない、上前独自の作品なのである。

「縫いの作業をしている時の指先は何ものかに追われて逃げるのに、命がけで去っていく虫のように感じられる。正

座をして、針は大きくけか、フトン針を用いて、親指と人指し指にゴムのサックを嵌め、中指と薬指には指貫きをして、薬指にはその上からテープを巻いて、小指にもテープを巻いて、五本指すべて武装した。」(註13)

「縫い」では「かのご縫い」の手法を中心に据えたという。

「縫い」の作品は、図版や写真などでは、その作品の細部や質感(テクスチャー)などは全くと言っていいほどわからない。実際の作品を見て、はじめて、その作品の模様が一针、一针、縫われたものであることを発見したときの私たちの驚きは尋常ではない。そしてそれが立体オブジェにもなっている。

7 「上前日記」に記された「縫い」

彼の日記に記された「縫い」に関連する記述で、参考になりそうな部分をいくつか再録しておこう。(註14)

1978.4.5 今度の作品は3×2mの黒布であったが、赤糸で縫い上げて壁に広げて押しピンでつけて見ると、作品の部分(糸で縫われたところ)縮んだままで270×116cm。使用した赤の綿糸はオリンパスエミーグランデ50g玉15個以上。この作品はアーティストユニオンの奈良展(5.9～14)出品の予定。

1979.3.5 薬指に指抜きを嵌めてフトン針で、ひぎの上で張った布を縫っているのだが二重になった生地のところ針の頭が指抜きから外れず、縫いの勢い余ったその反動で小指を深く突きさして、えぐれたようになり出血したが、今朝もその血とまらず(昨日の負傷)。

1979.9.23 制作は枠に張って何度も見る。又これと同じような前の作品と見くらべたりしているが、前のは赤布に黒糸で縫い詰め、その上から赤糸で縫い詰めたものだが、今度のは白布に前と同じように黒糸、赤糸を縫い重ねたものなのだが、その縫い残こされた4つの端が、前のと今度のとでは赤と白の違いなのだ。これが共に赤い台布(?)に縫いつけられているが、前のは赤の台布に作品の赤の縁だからすっきりしていたが、今度のは作品の縁は白になっているから、これが余りにも目についてならない。それを今日も縫いつぶしている。

1980.9.5 昨日まで続けていた縫の作品(3×2m)の作品とアートナウ80展に出品した縫の作品(2.7×1.9m)を今度ユニオンの大阪展に出品するのだが、2.7×1.9は美術館で包装されたのを解いて木枠から外して尚、縁の白い布もと外して、これらの作品は展示には棒で吊り下げられるようにする、そのため木の棒(胴打ちで)準備する、この木の棒は運ぶのに便利を計って、短くなるように2ツ継なぎになるようにする、又この棒を入れるために作品は布を管縫いにしておく。

8 上前智祐さんとの出会い

上前智祐さんに会ってから24年になる。1998年3月5日、舞子坂の上前氏のアトリエを訪問し、そこではじめて上前智祐氏にお会いした。当時上前氏77歳、私は44歳、大阪府文化課の学芸員であった。1999年2月に大阪府立現代美術センターで上前さんの展覧会を開催、あわせて作品も収集することを前提に、作品調査のために訪れた。その日時とその時の私の様子が、上前さんの日記にも克明に記されている。

「来訪、15時すぎ、アトリエにも大小の作品(新作)約10点程ならべているが、中塚が見たい作品というのは、やはり具体時代の作品である。「縫い」の作品には興味なさそう。…」(註15)

このとおりである。このとき私は上前さんとは初対面で、彼の「縫い」の作品はもとより、それ以前の作品もほとんど見たことがなかった。上前さんは「具体」の元メンバーであったが、その露出度は低く、知名度も低かった。現在でもその状況はあまり変わっていないかも知れない。しかしながら「具体」の調査と研究を進める中で、様々な事実関係をたどっていくと、その重要な参考文献として、必ずと言っていいほど上前の著書「自画道」に行きあたる。私は大阪府立現代美術センターの資料室で「自画道」を見つけ、そこで語られている上前自身の異色の経歴と「具体」の舞台裏の生々しいドキュメントが持つ資料的価値にひかれていった。そして次第に上前智祐という人物と作品に関心を持つようになっていった。

「具体」ブランドを私も信賴していた。それゆえまずは上前の「具体」時代の作品調査から始めたのである。当時、「具体」の調査、研究、展覧会、作品収集に関しては、既に兵庫県美や芦屋市美博、大阪市近美準備室(現在の中之島美)が実績を重ねていたが、上前智祐をクローズアップさせるような動きは全くなかった。開館以来、精力的に「具体」関連の展覧会を開催していた芦屋市美博の河崎晃一氏にあらかじめ事前確認をとると「上前さんの展覧会の予定はない」との返事だった。そして当時の大阪府顧問で国立国際美術館長でもあった木村重信氏に相談してみた。すると先生は「なるほど、身近であったがゆえにあまり気がつかなかったが、上前をとりあげる事は社会的にも十分に意義がある」という趣旨の返事だった。その助言に私は意を強くして、本格的に「上前智祐展」に取り組むことになった。

「上前日記」にも記されているように、当時私は「縫い」をはじめ「具体」解散以降の作品にはさほど関心はなかった。むしろ「具体」にたどりつくまでの彼の経歴や具象作品の方に関心が向いていた。また「具体」以降の新しい作品に対しては、客観的、歴史的な評価を下すことが難しいという考えも根底にあった。それから24年、ようやく「吉原」の死を経た「具体」解散後に、すなわち「吉原」と「具体」の軛から離れて、上前が独自で孤立の道を歩み始めた「縫い」を戦後美術史の表舞台にあげる時期がやってきたと言えよう。

9 上前さんの話しぶりと書きっぷり

上前智祐さんの話しぶりは、ぼそぼそと多少ドモリ気味で、たどたどしく、おどおどした感じで、お世辞にも明快、流暢といえるものではない。それに比して、文章の書きっぷりは、非常にマメで、極めて饒舌というか、多弁で、詳細を極めていっている。「話し（言葉）」では、人に対して十分に自らの思いを伝えることができないもどかしさが、「書き（言葉）」となって表現されているともいえる。それは上前が自費出版した何冊かの刊行物と彼の日記の膨大な文章量となって明白に表れている。「書は人なり、そしてまた文も人なり」それらに記された文章からは、会って話した時とはまた別の上前智祐という人間像が浮び上ってくる。彼の日記には上前智祐という人間の日々の生活に関わりのあるあらゆる事象が、毎日欠かすことなく、細かい字で、大学のノートにびっしりと、克明に記されており、彼が生きた時間が、ほとんどそのままで凝縮されている。記録魔という言葉があるが、上前智祐は、まさしくそれに当てはまる。作品に関する記録も克明になされている。著書や日記が、上前智祐が残した「書き言葉」による作品であったとするならば、彼が残した美術作品もまた、この日記と同様に、あるいはそれ以上に、上前の日々の生きた証、記録として、物質に表現されたもの（＝オブジェ）だったと言えるのではなかろうか。

10 上前智祐の作品の本質と核心

上前の作品を言葉で表現することは難しい。吉原治良が、かつてグタイピナコテカでの上前の個展のパンフレットに推薦文を書く際に、上前に向かって「君の（作品について書くのは）はなかなか難しい」と繰り返し述べているが、実際そのとおりである。それは何故かという、作品そのものに、言葉に変換する手がかりが、極めて少ないからである。上前の経歴や環境、境遇、エピソード、日々の暮らし、について語ることは山のようにある。しかしながら、作品そのものは、いずれも変化に乏しく、じっくりと時間をかけて鑑賞しないと、嶋本が指摘したように「すべてが同じに見えてしまう」からである。それゆえ、その作品を語るには、どうしてもその作品の本質や核心に触れなくてはならない。技術的な方法論や、表面的な変化に触れただけでは、上前の作品を語ったことにならない。

そうしたことは上前智祐の作品に限らないのかもしれないが。私たちは、作品を語っているようで、実際には作品の周辺を撫でまわして、作品を語っているつもりでいるだけなのかもしれない。その時、私たちは、いったい「作品とは何か」という根本的な命題に立ち戻ることになる。

「縫い」を含めて、上前作品の本質、核心とは、果たして何か？そのようなことを考えながら、上前の著述に眼を通していた時に、次のような上前の一文が目に入った。

「僕の頭には、強い劣等感と、確固たる優越感とが、気圧の様に流動している。そして、これ迄の経験によって培われてきた脳みそからは、酵素が発酵して、いろんなイメージ（アイデアともいうべきか）が次から次へと泡立っているのである。そして又、どんなコンピュータよりも以上に、万能的に訓練されてきたこの10本の指は、脳から神経をへたイメージを、選ばれた素材に刻みつけるのである。この刻印されたものは、最早ただの物質ではなく、その時の作家（僕）の、呼吸する息のこめられた永久不滅の僕の像（墓標）なのである。」（註16）

人はみな、この世に生まれ、生きてきた証、存在を何らかの形で、この世に残したいという欲望がある。それは、人によってさまざまである。動物的な本能という意味では、それは、第一義的には自分のDNAを後世に引き継ぐこと。子孫である子供や孫を次世代に残すということかもしれない。社会的存在という意味では、仕事、業績、功績、勲功、名誉、お金、家、財産、資産、後継者……。その中で、芸術家、美術家は、「美」という普遍的な価値を求めて、様々な知識、技法を駆使し、何らかの物質に、その価値を転換させようとする。美的価値の物質化という終わりなき、果てしなき作業である。上前もまたそういった業にとりつかれた一人であった。

それを上前は、「経験によって培われてきた脳みそからは、酵素が発酵して、いろんなイメージ（アイデアともいうべきか）が次から次へと泡立っている。」と表現し、「万能的に訓練されてきたこの10本の指は、脳から神経をへたイメージを、選ばれた素材に刻みつけるのである。」そして、「この刻印されたものは、最早ただの物質ではなく、その時の作家（僕）の、呼吸する息のこめられた永久不滅の僕の像（墓標）なのである。」と語った。

そのとき、上前作品の技術的、表面的、形式的な側面は、一旦、脇に追いやられ、一瞬姿を消す。上前智祐という人間の生きているという息遣いと心（精神）が、そこ（作品＝物質）に宿っているのかどうか、そこから伝わるのかどうか、作品にとって最も重要な価値となる。上前のいう、「呼吸する息のこめられた永久不滅の自分の墓標」この墓標こそが、上前智祐の作品の核心部分であり、本質であると言えるのではなからうか。

註

- (1) 上前智祐 孤立の道 共同出版印刷 1995 年
上前智祐 集合と稠密のコスモロジー 大阪府 大阪府立現代美術センター 1999 年 2 月
上前智祐の自画道 卒寿を超えて BB プラザ美術館 2012～13 年
The world of Chiyo Uemae Whitestone Gallery 2013
CHIYU UEMAE A SOLITARY PATH Whitestone Gallery Hong Kong 2015
- (2) 上前日記 1947 - 2010 上前智祐と具体 中塚宏行編 上前智祐記念財団 2019 年 197 頁
- (3) 芦屋市美術協会会員展 上前日記には「芦屋会員展パーティー」とあるが、これは芦屋市美術協会展ではなく、芦屋美術協会会員展のことと思われる。
- (4) 上前智祐 孤立の道 前掲書 110 頁
- (5) 上前智祐<縫い> ビデオ記録映像 28 分 聞き手 清水公明、撮影・編集 小池照男 1998 年 12 月 23 日
円形に関しての清水と上前のやりとりは 24 分頃にある
- (6) この展覧会の出品目録として「縫い」の作品・出品表」があり、35 点の作品が、番号、寸法、制作年、出品歴によって記されている。そして但し書きに、「未発表作品には発表後に大きく手を加えたものも含む又、出品作品には多少の変動あり、1992 年 1 月 25 日現在」とある。この作品リストと山下克彦氏が撮影した展覧会記録映像と比べると、但し書きにあるように若干の食い違いが見受けられる。出品表のうち、出品されていない作品が 6 点、出品表にはないが出品が確認できる作品が 5 点で、計 34 点が出品された。本カタログにはそのことを反映させているが、出品表にあって、実際には出品されていない作品は出品予定であった旨を記している。
- (7) 山下克彦 ABC ギャラリー 上前智祐自選展 ビデオ記録映像 1992 年 4 月 17 日撮影（1 時間 25 分）この映像では「縫い」の縫い目と縫い糸、支持体の布とがわかるように、クローズアップした映像を多用している。なお、(註 5) の小池照男、(註 7) の山下克彦が撮影した映像以外に上前の<縫い>に関する記録映像として、「1980.8.24 林君写す」と記された上前の<縫い>制作中の 8 ミリ映像（約 3 分）、大阪府立現代美術センターの個展（1982.6.7～12）の 8 ミリ映像（約 3 分）、神戸のギャラリー、サーカスサーカスで開催された<縫い>の個展（1993.11.7～20）のビデオ映像（約 10 分）など、全部で 5 本あり、いずれも現在 DVD に変換済みである。
- (8) 上前智祐 ある人への返書 共同出版印刷 1998 年 70～71 頁
- (9) 上前日記 前掲書 287 頁
- (10) 上前智祐 「縫い」の作品について 小パンフレット（全 14 頁） 2005 年 2 月 4 頁
- (11) 上前智祐 「縫い」の作品について 小パンフレット 同前
- (12) ある人への返書 前掲書 95 頁
- (13) 上前智祐 「縫い」の作品について 小パンフレット 同前 2～3 頁
- (14) 上前日記 前掲書 204、208、209、212 頁
- (15) 上前日記 前掲書 282 頁
- (16) 上前智祐 現代美術―僕の場合― 共同出版印刷 1988 年に挟まれた 4 つ折りのパンフレット（1988.5.13）の文章 10 年後、ある人への返書 前掲書 112 頁に再録